鴉の嘲笑い

蒼城雪紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鴉の嘲笑い

【Ｎコード】
Ｎ２８０９Ｕ

【作者名】
蒼城雪紫

【あらすじ】
病気で入院している女の子と、その幼馴染の話。

その日窓から見えたのは、雲一つない真っ赤な夕焼け空だった。

少し前はまだ空は青かったというのに、いつのまにか日が沈みかけている。昼間はひどく病室にも響いていた蝉の声は、今ではあまり聞こえない。窓から差し込む夕陽の光が白い壁に囲まれたその病室を赤く染めていた。

病室には、窓際のベッドの上に横たわる少女が一人。しばらく外に出ていない彼女の肌は白く、身体も少し痩せこけている。

彼女は窓から見える空を見上げていた。入院してから特にやることのない彼女は最近になって空を眺めるのが習慣になりかけていた。

しばらく彼女が空を眺めていると、トントンと扉を叩く音がした。それに気がついた彼女は体勢を変えることなく、ただ『どうぞ』とだけ声をかけた。すると扉が開いて、彼女と同じくらいの年齢の少年が入ってきた。その手には、お見舞い用なのか、花束が抱えられていた。

彼は持ってきた花束を病室にあった花瓶の隣に置いてから、彼女の横たわるベッドの横にあった椅子に座った。対して彼女は彼がやってきてからといって何かすることもなく、窓から見える空を眺めていた。

「ホントは昼間に来るつもりだったけど、急に午後も練習入ったからさ」
「ふぅーん」
「別の日にしようかとも思ったけど、しばらく来れる日なさそうだし」
「そう」
「この時間帯は迷惑だったか？」
「別に」
「そうか、ならよかった。そういればな、今日　――――　」

彼が話しかけているにも拘らず、変わらない空への視線。まるで彼に興味のないような相槌。普通なら、彼女の態度はきっと彼の機嫌を損ねるものだろう。けれど、彼にそんな様子はなく、ただ彼女に話しかけていく。

彼の話の内容は、彼の家のことや、学校のことなど、彼の特に変わらない日常のこと。話したことはそれなりに多かったが、彼はまるで毎日会っている家族か友達に話すような調子だった。彼女も視線は変わることはなかったが、『そうなの』『へぇ』などと相槌だけは打っていた。

そして、一通り彼の話が終わると、彼女は突然彼の名前を呼んだ。

「私、もうすぐ遠くに行くの」

あまりに唐突な話だった。

彼は思わず唖然としたが、それと同時に疑問も浮かび上がった。彼女は病にかかっている身だ。だからここ最近はずっと入院していて、病院の外どころか病室の外にも出ることができないような体調だ。

そんな彼女がどこかに行くことなんて誰も許そうとは思わないだろうし、そもそも彼女の身体がそれを拒否するだろう。だから、彼女がどこかに出かけるなんてできるはずない。けれど、彼はあえてそれを口に出すことはしなかった。

「……遠くってどこだよ？」
「すごく遠くて、ある意味ではすごく近い場所」
「なんじゃそりゃ」
「あと、アンタが普通に生きてればあと五十年先……いや、七十年先まで行けないような場所」
「……意味わかんねぇ。なんだよ、俺は五十年先まで行けないのにお前はもうすぐそこに行くって言うのか？」
「そうだよ」

彼女の言っていることの意味がわからなくて、彼は首を傾げた。そんな彼の様子を知ってか知らずか、彼女は空に向けていた視線を外し、ゆっくりと起き上がろうとする。けれど、長い入院生活で体力のなくなってきている彼女は起き上がるだけでも大変で、その様子を見た彼が自然と手を貸そうと、とっさに彼女の手を取る。

彼女の手が、彼の手をぎゅっと握った。その手は微かに震えている。

「侑、あのさ」
「……なんだ？」

彼女の微かに潤んだ瞳が彼の姿を捕らえた。二人の視線が交差し、2人の間で沈黙が流れる。普段とは違う彼女の様子に、彼は戸惑って、どうすればいいのかわからずにいた。

慰めるべきか、元気づけるべきか。彼は思考を巡らせるが、考えつくものはどれも彼女が望んでいるとは思えないものだった。考えても考えても、わからないまま。そのまま時間が流れていく。

どれくらい経ったのかわからないが、ふと彼女の手の力が緩んだ気がした。

「……沙奈？」

彼が彼女の名前を呟いたとき、彼女は視線を外した。

「……やっぱりなんでもない」

そう言うと、彼女は彼の手から自分の手を離した。

「もう面会時間過ぎるし、そろそろ帰った方がいいんじゃない？」

「……そうだな」

彼女の言葉の意味を追求することはしなかった。何かわからないが、聞いてはいけない気がした。聞いたら、何かが壊れてしまうような、そんな気がした。それに、彼女の雰囲気が『何も聞かないで』というような、そんな様子だった。

だから、彼はいつもどおり、何事もなかったのように立ち上がった。

「それじゃあ、また来るからな」

「ご勝手にどうぞ」

彼女もまた、さっきまでのことはなかったかのように、そう言った。帰ろうとする彼など関係ないと言いたげに、また空を眺める。

彼はそんな彼女の様子をしばらく見た後、そこから離れた。そして、病室の扉に手をかけた時。

「さよなら」

と、彼女のいつもより少し小さめな声が聞こえた。

彼女はいつも、彼が帰るときに何か言うことはなかった。だから、彼は少し戸惑った様子で彼女の方に振り向いた。でも、彼女は彼が

来たときのように空を見上げていたので、自分の気のせいだと思った。そして、そのまま部屋を出ていって、扉が閉まってしまった。

「……今さら言ったって、困るだけだよね」

彼女の呟きにこたえるのは、鴉の鳴き声だけだった。

（後書き）

前回同様、他サイトに掲載したことのある作品です。この小説のテーマは「死んでいく者が誰かに想いを伝えることは許されるのか」。というか、この疑問に対する私なりの意見を『彼女』の行動にして小説にしたと言った方が正しいかもしれません。タイトルについてですが、鴉の鳴き声というのは死の前兆を表すのだそうです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2809u/

鴉の嘲笑い

2011年10月8日11時00分発行